

蘇芳集



夏風邪

高橋 さえ子

つくつくし

青山

丈

夏風邪の長引く何もかも遠し

虹二重奏楽堂の森しんと

浅草の鬼灯市の日暮れかな

山風急大胆に脱ぐ竹の皮

小雨降るやうに水紋あめんぼう

赤松の根方の夕日冷し酒

綿菅の白の陰影旅の果

朝顔に届くヤクルト・ヨーグルト

長い橋渡る秋風だと思ふ

底紅の咲く家の子が通りけり

秋扇ひらいて閉ぢて帰りけり

木槿より離れし人の年寄りぬ

高い木の高いところできつくつくし

降先生、一周忌の八千代正覚院

師の句碑へ着くまでずつとつくつくし

四万六千日

富田正吉

森の掟

野路斉子

真つ直ぐな雨の降りけり蓮の花
だんだんに雨となりたる我鬼忌かな
四万六千日膝のあたりが濡れてゐて
初蟬と思へば鳴いてくれにけり
不忍池の土用次郎を歩きけり
揺れたるはもの言ふごとし紅蓮
桃食うて人間らしくなつてゐる

露けしや

長沼三津夫

涼しき数

前田陶代子

霊水の澄む他のなく澄みきつて
露けしや庭石動くこともなく
船影の沖にそのまま秋深し
国境のたちまち暮るる大刈田
船影の灯を洩らしをり星月夜
露けさの仮の世の音を遠汽笛
船笛にふと呼ばれけり星月夜

湧き継げる雲に音無き大暑かな
雨あとの樹相のしかと土用入
町川のけふの水嵩南吹く
噴水を風が散らしぬ我鬼忌かな
游禽の涼しき数をまた数ふ
花蓮のほぐれんとして日を弾き
赤檜の瘤に日当る晩夏かな

時計塔

宮尾直美

九月十五日

吉田幸敏

八月の小学校の時計塔
残照の川に子を呼ぶ夏休
まひまひを見てゐて刻を忘じをり
ケータイのメール簡潔水中花
広島忌いく度日照雨通りけり
盆の月身の衰へを姉が言ふ
ひとり居に夜風の荒ぶちんちろりん

魂送る

八木下末黒

ちかぢかと海ある房州団扇かな
少年にたやすく還る草いきれ
朝ぐもり理髪のサイン回りだす
少しだけ谷中の墓に蟬のこゑ
道灌のゆかりの寺の目高かな
露伴忌やむかし話の脚立釣
川幅の今が上げ潮魂送る

読み返す先師の句集夜半の秋
おもかげのこゑまた若し流れ星
日記空白九月十五日以後
秋日傘消えし九月の埤頭かな
一つ音してゑのころを風が吹く
その声に振り向くことも秋桜
師の句碑の裏へも回る露草忌

沖は白波

小川美知子

夏帽子いつか遠くへ行くための
心もち日傘を傾げゆく女
奥の間にももの取りにゆく蟬しぐれ
夜の秋の大きな画集めぐりけり
プラットホーム端まで行けば夏終る
船に積む漁網嵩なす晩夏光
沖は白波そのほかは秋の暮